第 6 回(平成 29 年度)三島海雲学術賞受賞者と選考理由

【人文科学部門】　1 名（敬称略）

★内記　　理　　京都大学文化財総合研究センター　助教　博士（文学）

受賞テーマ　　『ガンダーラ彫刻と仏教』

授賞理由

ガンダーラ地方を中心とする西北インドでは、紀元前後から数百年間に渡って仏教文化が栄えた。西北インドでは盛んに彫刻が作られているが、ガンダーラ彫刻が作られた時期についてはこれまでの多くの研究にもかかわらず未だ不明な点が多い。

本書において受賞者はこのガンダーラ彫刻の制作時期を特定するために、まず考古学による発掘調査成果を用いた美術様式、そして図像や技法的な観点などから年代を考察した。さらに直接的に彫刻そのものから制作時期を知るために制作年が刻まれた彫刻を資料とし、同時に彫刻以外の紀年銘資料を分析する手法を用いてこれまで古代インドに複数存在した暦法から主要なものを見出し、彫刻の制作年代比定に成功した。これらの最新の考古学的研究成果や出土文献研究を基礎とする確実な歴史学的知見は、19 世紀後半以来西欧中心に広まっていた「ガンダーラの仏教彫刻類はヘレニズム東漸に始まる西方ギリシャ・ローマ芸術の影響下の所産である」という、これまで学界のみならず教科書や一般教養人間でも有力であった通説を見事に覆す内容である。

これらの研究成果をもとに、受賞者は彫刻以外の仏教寺院遺跡の建物の石積み方法や、より大きな視野から王宮遺跡からの出土土器にも分析を進め、紀元後 200 年ごろにガンダーラ地方で大地震が発生したことを明らかにし、このことがガンダーラ地方での物質文化の変容に大きな影響を与えたことにまで興味深い考察を進めた。

このように自らの問題意識や方法論を明らかにし、先行研究の的確な紹介や評価を踏まえた上で展開される受賞者の論旨は明快で、本書は新進の考古学者が著した専門書として、アジアの歴史研究の今後の発展に大きく貢献するものと高く評価される。なおあわせて、本書の内容が広く世界の関係学界に発信されることが期待される旨の意見が選考委員のあいだであったことも付記しておく。